大阪は‘まち’がほんまにおもしろい

大阪あそ歩 OSAKA ASOBO®

古代から続く菅笠(すげがさ)の里・深江

～こころ深江の菅小笠(すげこがさ) 天の下にぞ名はみちにける～

暗越奈良街道と放出街道が交差する深江は、古代から栄えて交易やものづくりの舞台となりました。とくに深江村の氏神で、鋳物御祖神社の別名もある深江稲荷神社は「深江菅笠ゆかりの地」として知られ、江戸時代には街道の名物として『摂津名所図会』などにも記載されました。いま現在でも伊勢神宮の式年遷宮や天皇即位後の大嘗祭には、深江の菅笠が調進されています。古き良き歴史街道の趣きが色濃く残る、「心深江の菅小笠のまち」を歩いてみましょう。

① コクヨ株式会社・本社

明治38年(1905)、富山出身の実業家・黒田善太郎(1879～1966)が黒田表紙店として創業。「国(郷里の富山県のこと)の誉れとなるように」と商標を「国誉」と定め、昭和36年(1961)には社名も「コクヨ株式会社」へと変更しました。大ヒット商品として、30年間で累計約17億冊を出荷したキャンパスノートがあります。黒田善太郎の創業精神「カスの商売」(美味しい商売はすでに他人がやっている。世の中には面倒でやっかいで儲からないカスの商売しかないが、世のため、人のためになることをやり続ければ受け入れられる)はテレビ、雑誌などでも紹介されて広く知られています。また国立富山大学にある黒田講堂は、黒田善太郎の寄贈によるものです。

② 暗越(くらがりごえ)奈良街道

「くらがりごえならかいどう」と読みます。古代から難波と奈良とを最短距離で結ぶルートとして知られていました。暗峠(東大阪市東豊浦町と奈良県生駒市西畑町との境にある標高455メートルの峠)を越える、急勾配の厳しい街道ですが、ここは初代天皇の神武天皇が通ったという伝承があり、東成区には「神路」というような地名なども残っています。暗峠という名称は、樹木が鬱蒼と繁って、昼間でも暗い山越えの道であったことに由来するといわれています。元禄7年(1694)には俳聖・松尾芭蕉が、大坂へ向かう途中に暗峠を越えました。9月9日の重陽の節句のことで「菊の香に くらがり登る 節句哉」という句を詠んでいます。また奈良を越えると、伊勢街道となり、伊勢参りの参道にもなりました。現在は国道308号および大阪府道・奈良県道702号(大阪枚岡奈良線)が、ほぼ街道を踏襲しています。昭和61年(1986)には建設省と「道の日」実行委員会により、日本の特色ある優れた道路として「日本の道百選」にも選定されました。

⑨ 深江の段倉(だんくら)

深江界隈は喧騒な車道から離れて、一歩、旧村の中に入っていくと、驚くほどの古い家並みと板塀が続いています。またかつては河内湖、笠縫島で、低湿地帯であったことから、湿気が多く、少しでも雨が続くと洪水などが起こって水に浸かりやすいところなので、大切なものを保管する倉の中でも、さらに重要なものは、石を高く積みあげた倉の中に納めました。この石を高く積み上げた倉が並んでいる様子のことを段倉と呼び、大阪市内とはとても思えない景観美を形作っていて、古き良き深江村の風景を今に伝えてくれています。

⑧ 法明寺

文保2年(1318)、融通大念仏宗の中興の祖、法明上人(1279～1349)が開基しました。法明上人は鎌倉末期の弘安2年(1279)に深江村で生まれて、父は清原右京亮守道、母は枚岡神社の宮司の娘で桔梗前といいます。25歳のときに高野山で修行をして、石清水八幡宮の神勅により、融通念仏宗の総本山・大念仏寺の第7世の法燈を継いで、鉦や太鼓をたたいて村々を歩く念仏踊りと、「自己の唱える念仏の功徳が自他ともに融通し、一人の念仏往生が衆人の念仏往生を約束する」という教えを広めて寺運を挽回しました。また法明寺境内には雁塚と呼ばれる2基の石塔があります。弘長2年(1262)、延元4年(1339)と記されていますが、これは「その昔、清原刑部丞正次という弓の名手が冬の日に狩りに出かけ、雁の先頭の1羽を射ち落としますが、なぜか雁には頭がありません。周辺を探したが見つからず、そのまま帰りました。次の冬に狩りに出て1羽の雌の雁を射ち落とすと、羽の下から乾いた雄の雁頭が出てきた」という伝承があって、この話を聞いた法明上人が、雁の夫婦愛に心打たれ、その冥福を祈るために四重の石塔を建立したものといわれています。

⑦ 深江の菅田(すげた)

江戸時代に伊勢参りが流行ると、大勢の旅人が大坂・玉造の二軒茶屋を出発して、「大坂はなれて早や玉造 笠を買うなら 深江が名所 ヤートコセ、ヨーイヤナー」と伊勢音頭を歌いながら、深江で菅笠を買って、賑やかに旅をしました。菅には浄化の働きがあると信じられていたので、人々は道中安全を祈願したわけです。江戸末期からは菅の釜敷きや、瓶敷き、皿敷きといった菅細工も作られ、明治・大正期には海外にも輸出されたといいます。しかし都市の近代化が進むと、名物の菅田はみるみる姿を消していき、このままではいけない、と平成19年(2007)8月、地元の有志住民が「深江菅田保存会」を結成。南深江公園に約4平方メートルの菅田を復興して、菅草の育成に成功しました。現在では、更なる良質の菅の収穫をめざして、約80平方メートルの本格的な菅田が復元されています。

③ 放出(はなてん)街道

大坂と京を結ぶ京街道と、平野郷から高野山へ向かう中高野街道とを結ぶ街道で、ほぼ摂津と河内の国境を通っています。八剣神社(阿遅速雄神社)の参詣道であることから剣街道とも呼ばれました。平野郷から東大阪市布施を通り、放出を経て北上し、旭区清水町を通って守口市高瀬町に入り、竜田通りで京街道に接します。

④ 高井田系ラーメン

この辺りにはラーメン屋さんがいくつか集まっていますが、高井田系ラーメンといって、大阪では珍しい「ご当地ラーメン」です。特徴はストレートでシンプルな濃口醤油ベースのスープと堅めの太麺で、うどん並みの太さを誇るラーメン屋もあります。東成界隈には、「ご当地焼きそば」として、今里焼きそばがありますが、こちらも太麺で、この辺りは太麺文化が根付いている地域といえます。

⑤ 釜師・角谷家

河内方面は、古代は河内湖で、やがて淀川や大和川の土砂が堆積して陸地化していきましたが、その中には鋳物に適した良質の土砂もあって、中世には河内鋳物師という職人集団の活動拠点にもなりました。角谷家はもとは宮大工の家系でしたが、明治18年(1885)頃、鋳物の魅力にひかれて初代・角谷巳之助(1869～1945)氏が鋳物師として活動をはじめました。茶釜や鉄瓶なども制作して、大正14年(1925)のパリ万国博では鉄製の燭台を出品して好評を博しました。2代目・角谷一圭氏(1904～1999)は、幼少時から父の鋳物作りを手伝い、21歳の時には大阪府工芸展に出品した鉄瓶が受賞。その後、日本伝統工芸展で高松宮総裁賞、朝日新聞社賞を受賞して、昭和48年(1973)と平成5年(1993)には伊勢神宮式年遷宮御神宝鏡を制作しました。昭和51年(1976)勲四等瑞宝賞を賜り、昭和53年(1978)には人間国宝に認定されました。現在は東大阪市高井田に工場を設けて、3代目・角谷征一氏が釜造りに精根を注いでいます。また平成25年(2013)の式年遷宮御神宝鏡の制作も、すでに発注されています。

⑥ 深江稲荷神社

深江村の氏神で、鋳物御祖神社の別名もあります。社伝によれば、第11代垂仁天皇(紀元前69年～紀元後70年)の頃に、笠縫部の祖が笠縫島の宮浦に下照姫命を奉祀したのが始めで、その後、和銅年間(708～715)に山城国稲荷神社を勧請したとあります。笠縫部は大和国の笠縫邑に住み、皇祖の御鏡を守護した部族で、のちに当地に移り、菅笠を生業としました。『万葉集』には「四極山 うち越え見れば 笠縫の島 漕ぎ隠る 棚無し小舟」(高市黒人)とありますが、当時の深江は入り江に浮かんだ低湿地帯の島で、笠の材料確保のために、移住したと言われています。「縫いつたる こころ深江の菅こがさ あめの下にぞ 名はみちにける」(千種中納言)と歌われたほどの深江名物で、伊勢神宮式年遷宮の御神宝の菅御笠を調進して、現在も大嘗祭に使用する笠は、深江から天皇家へ献上されています。古くは貴族階級に供されましたが、近世には旅行者にも用いられ、伊勢参りには必須だったことが『摂津名所図会』に記されています。境内には大阪府史跡「笠縫邑跡」の碑と大阪市顕彰碑「深江菅笠ゆかりの地」があります。

【注意事項】 この地図は「大阪あそ歩」のまち歩きの資料として作成されました。まち歩きには、歩きやすい服装と靴を着用してください。車などによく注意し、各自で責任をもって行動してください。また、住宅地では住民のプライバシーに十分配慮して歩きましょう。

【お問い合わせ】 大阪コミュニティ・ツーリズム推進連絡協議会「大阪あそ歩」事務局　電話06-6282-5930(財団法人大阪観光コンベンション協会内) 「大阪あそ歩」の詳しいプログラムはホームページをご覧ください。　http://www.osaka-asobo.jp　または 大阪あそ歩 でネット検索を。

大阪あそ歩のコースは約2～3km、2～3時間程度を基準として作成されています。